

卷八
人

911.3
7
人

内閣文庫

柳古



海後

青面
商美

四門

七月の午先伊豫の山に極湖を參り
船不ぞ進みて海舟の尾ノ道の如く
以て上船於一月の既暮と云ひて
船上の事と云ふ

和歌山國や和歌山國

南月入るに至る大羽立つゝ
船の場あと被る

南月入るに至る大羽立つゝ
船の場あと被る

名録

材のあれ植やまの 村山 美羽
ム月や年もとて女やま 沢柳
移さやあよねまうとて門山 フ舟

安藝

三京のくくうとほくとほくとほくと
けりに安藝のハロあとアラヨシカナアリと
和樂とつじて材の名をあらわすあるべ

かのニトシアラモヤヒタリシテシテ
ちくひもまくとアラモヤヒタリシテ
マタシテシテシテシテシテシテシテシテ

材の名をあらわす里の諸森林

ちくひはまくとアラモヤヒタリシテシテ
マタシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

わい市をあらわすや草木の
名録

全江竹庵とよま

いよがよはるを絶す 純正

董二房の東京とよま

丁合やふきもくとく子のゆ

周氏

至日十日吉日よりまむけとて何事
体たまどらかやあわくの隠れあく無能の
「さあらう」とくくに事のあらとが
「まこと」わすれのまことか

廉し年々とむね取くや勝手よ

桂枝

あくまのまくらやゆく

体ち

れのやうとあらのあらある アラ

胡洞

あくまのまくらやゆく

まくらやあらあらするもアラ

青松明神工舎

清山や計の取と草と月

周防

店をすましのとがむといふ
よひとをとくとくとほの
あらゆるとぞく

市の中もあてやせん

長

七月の末長州からまよへる

心地よきれども

文子とお

いはのうよお家能の

ひとみて

さとむのうよ遠ひてや

平家解

短古行

危朝

西の御子の事
あやまの義と並
御子絆ひらをみる
各月の季とねちよりあつて
毎式
打はせしむるの 短染
かくはなれ成るてくらえ
家相
主の身よはれま東山賣
ち

ひのの口うせゆるに傳うた
瑞すれおとのきふよから
主の身よはれ成るてくらえ
主の身よはれま東山賣
ち
主の身よはれま東山賣
ち
主の身よはれま東山賣
ち
主の身よはれま東山賣
ち
主の身よはれま東山賣
ち

湯鉢ハヤシやアハヤドハヤド
隣の山へ此處の草
内と私アタシが娘マネをもつて
アラカト市役の所シヨウをさよ
ちやうの山の月ヒル得
甲とさすは此處ハヤシと
アラカト山の仲間マネの小姓コウジを
羊ヒツジと山羊ヒツジの山ヒル也

山ヒルの山ヒル行ハヤシる
川アラカト四季シキ知シナガり

名源

相ハヤシやアラカト山ヒルの草ハヤド
隣アラカトの山ヒルも揚ハヤシる
名月アラカト山ヒルの月ヒル
牛アラカト山ヒルの牛ヒル

やうやくのむかし行の竹文解
はさのすかでかきの筆筆可白

まつりあはせはましむ跡に

まつての筆筆をかきがれまわ

かくこくかの筆筆がありま

二段の筆筆をかきがれまわ

えくわくとおひがはるやふの見

點は

まの写真とあやめえはれ

れ

か却_{シカツ}中

ましらかよもじりぬアヌム

漢柳

高の木はくまくまくまくまく

墨壁

あとちね船_{クル}とくく高

内

豈之石

まろすうをたのト金をと
経工事_{トシ}やまの

アリ室_{トシ}やまの圓_{トシ}

おれのかまほえと信てまわる
ね林の二派とゆくがよしとす
かまほえとまほえとす

154

かまほえとまほえとす

小糸とらしくあらとよすかまほえ
素アヌとひねばちうじ部のひつじ
の育成筋とくねんのくねんの
お様アヌヤハラヒトシカトモアリ出
ひつじの筋と博多筋とお筋の筋と

うそとまほえとす
はくらまほえとすとくわすりのくわすり
鷹立とまほえとすとくわすりのくわすり
サクテお様アヌふりく止りうづくま途
うそとまほえとすとくわすりのくわすり
筋のくせかわくわくくわくのくわくとく
あくらにむかひと傾くじくわく
うそとまほえとすとくわすりのくわすり
うそとまほえとすとくわすりのくわすり
うそとまほえとすとくわすりのくわすり
うそとまほえとすとくわすりのくわすり

かへるがまの事へてかほ人の
名とすむるかへる事へてかほ人の
そのあへる事へてかほ人の

おほきの事へてかほ人の事の後

かほ人の

おほきの事へてかほ人の事の後
おほきの事へてかほ人の事の後

おほきの事へてかほ人の事の後

七月のあかしやおほいとくらひ
麻衣とくらひておもひてあらひ
おとづれとあくとあくとくらひて
あらひてくらひてあらひとくらひて
うそふうかとおもひとくらひて
うそふうかとおもひとくらひて
トカクとくらひて

おほきの事へてかほ人の事の後

おほきの事へてかほ人の事の後
おほきの事へてかほ人の事の後

彼の爲めやうへんとあまのあ

アキラの心地と正しく

至るゝ頭陀の緒かく一休さん
丁度よき向日和や秋からく 算木
のちよほの風よ秋までのニヨギ
然ふの心地

其の

三三か月とや内中のうじゆ

秋十月うち深江の老道者とやくら
冬うかづかあくの老道者とやくら
團扇裏端を巻きてゐて世にのむ様
やくあつた

あもあくよきあじわひの酒みき

はいとよく太門跡とよすやあむとよす
けりとあはれとよす縁れきりーうじゆの
あーのほよはあくとよす病根とくら
竹のさざれを新よきへると焼く
あがく深江あらわく

このおそれ

あらゆるいのとくらむのうへ

大門をとまへ船跡よゑかざあへ
ねは門中振ふやう、さあ、いづれの浦より
せあすれりてあがむらまつむらめ
主のふる浦と、おのれの浦と
ひそくわざまきあたかと、おのれの浦と
くまの浦又と祖母とのまくらと、おのれの
まくらとおのれのまくらと、おのれの

おのれのまくらと、おのれのまくらと、おのれの

肥あ

主の浦と、おのれの浦と、おのれの浦と
おのれの浦と、おのれの浦と、おのれの浦と
おのれの浦と、おのれの浦と、おのれの浦と
おのれの浦と、おのれの浦と、おのれの浦と

おのれの浦と、おのれの浦と、おのれの浦と

かすみや、唐草のまくらと、おのれの浦と

おのれの浦と、おのれの浦と、おのれの浦と

まの處一ちかく

かわの處の處もひきかきやあわよ

あらわるる

それや本むの月れをあら

かわの月のまきかきし小舟の

とすく舟く

風のあらわしにはまくわらふ

はまよりお望いあら

あらわしにむすびや竹の風

短お行

かす

山の名とぞみまわす

おれの山の山おれの山お

おれの山おれの山おれの山お

おれの山おれの山おれの山お

りれそくちまがよきの月
道奥の勝をさうめむ
深山のあ年のまじよがすり絃
春はるくらむをの山か
年かくとえまくさくよせ紙
女中のやうにほのひやく
壁縫とかくよひの花とされ
節跡の風やよけしかく
市

四葉わく車と間車のやうで
波音うかるのもく／＼
あとつまむけいはくあくね
鳥とくらぬのとく
おまよめりの他の氣とく
みまかく葉ぢやく
りくわのじくの月
あらゆるとくわあれあ
市

入るがまのむじのむ様る
そつとおもふる小怪慢る
達也むすぶるの法あれ
市

年月を以て跡もたれ
き

通か行

其弟

十月やあしにまゐる年の匂い
所れのそじよなよ大久 さく

きよもとまよと林屋はるにて
ひらともとまよと竹林のち
うほの氣よ通かよせつゝ
舍半

山ちの匂とちよと草野 東柯

林屋とまよと竹林の山舍

春あさりとみの二味深 布

ひきうちよとまよと草野

母のまよと竹林の山舍

山里の山羊捕革のいとわ
行岸にまつて山をうづく
山のあさとふとゆと梓山
其をつゝて山を減のえ的
絶し山をひこすすめあれも
かむよつて山をちゆの山
竹山平もえすやまと山のひま
えの竹山もひて山を
毛草りてお法みのよ家
月も冬も雪も十日十夜
行山も雪も山門也
山の面ちるの山所れ
年も山も山の山所れ
山の山も山の山所れ

名録

あ人とまよ間ちう猪の毛
かす
山のあはせたやせの神
松市
あはせとあはせむる胡せ
起角
あはせのあはせり新の久
幸何
あはせやせぬるまよりあはせ
金年
山のあはせりあはせやあはせ
和也
あはせとあはせやあはせれ
元重

半丸もあはせの様れ
邦幸
弓矢直にあはせ山様
毛ら
半丸もあはせ山様
一ノ弔

旅文通

あはせをあはせやえ様
宇津
あはせやあはせの様とやのじ
峰主
あはせとあはせ山様
立石
あはせの様
杜鵑
鶯

竹慶堂記

加十丈の株號と竹慶堂と云ひ、此處
あるわの山の北に一處、竹の林す
哉と號ふの爲めにたゞこの處には用
意する所はあつたが、僕がへる日
は、此處の竹の林を、その根柢から
其の枝葉まで、悉く見渡す。其の根
柢は、月次の連化するまゝなるが、
さて、其の根柢から、其の枝葉の
おなまかに林林として、見ゆる。

竹の林の見度は、よほどのものとばかり
でなく、酒と、或ある酒呑と、筆と、酒と
竹葉の名はあらかじめのことを換れば、や
といふと、さういふと、行と、や
今、の堂と、さういふと、さういふと、
竹林の聲、詩酒の聲、ひ伸びて、七賢の
名と、竹の聲の行をきくものせんのを、
ありて、ち日ひの聲ひる。やうに、
彼三事と、額をうけて、日く、其の金華
を、と、やえり、其門のあらかじめの
法ださり、てゆく二物の枝と、ちりて、

及やくの事は放ほの付すと云ふ
あらそゑのものもねりてよ祖廟の御言
かく御傳の御行せどかへはく人の
比と御傳の御行せどかへはく人の
あて人和の事と云ふ御傳を
言語の事と云ふ事もいふ事あれば
はく御傳の事と云ふ事

日吉の御事の御事の事

十月二十九日是吉と御定とすち仲を中ひ
此の御事とその御事の事と
ハトヒヤの御事とその御事の
酒家とみる御事と御事の
事と御事

あらそゑの事とその事とその事

章

竹ちかこの車中ちかの寶珠の事と御事
事と御事と御事と御事と御事と御事

ねどりとつねておきのまへと初
うの古俗と云ふ事あり竹子在はせ
るの事無く御用御使の為用
をもと一社の御神一坐して是よりの
御神を守らんや

も鳥や虫の事の御神也

探頭二章略

左の邊より金屋の主と云ふ者も二月
ノトモリ御神を守りて中止生奉
えど御守りの竹子の事ア抱玉
おとすから車中も一言お荷と
新郎がお荷物と申して御神の御
人御守りを申す上との御神とテ
人御守りを申す御守りの御神とテ
御守りを申す

緒のあらわし御守り

かある中の御守り

御守り

ほくわや神をみれ節物

和月よりひまし高木の筆と
ほんかく

らわめりやるのをよけむ

晚涼齋記

其の下より中二階ともいふはうへてゆふと
云はへて歌をゑはへと音と音と
らわや大なるのあさうに音のひうと
歌を歌ひのむきはくの音の平とさざれ
ひがこの音をもと歌を歌ひの音をうたはせ

千ちよもんうれのよかどもよか
れ奥山樓の深くうきよすやあわら時
は車の標もとよみおと車よと車
ひやくゑあへてお船かく車のよかよか
うちの國のう寂と詩とよかよか
ほとおとおとよかよかとせんじてわらと
そよのうとよかよかとせんじてわらと

宣室記

りゆふもとおとせんじてわらと

辛むをとおける筆畫の筆毫と
やがての筋書きあく所の筆ふるいし

心も毫や和舟のほせ

能る

墨ふえをりゆのひ連とせんかく一うきの
日もむづく一筆の三金の二とせんと
ひきのじゆとからひて竹ちよぎの
絃音うきよよくのゆの

角金とて玉アテ

引ひよひはひはひはひはひはひはひはひはひ

あひすてゆきひひひひひひひひ

配角

ひひひひひひひひひひひひひひ

松市

ひひひひひひひひひひひひひひ

みそ

ひひひひひひひひひひひひひひ

表ハ年

ひひひひひひひひひひひひひひ

私印

ひひひひひひひひひひひひひひ

小安
市

ひひひひひひひひひひひひひひ

五國をや唐をめぐる一國

私共

後石をまかれてゐたの行がくと

其弟

高はとほりあつた

まことに山や竹のよき通ひる お成
りゆきのわざひ跡のよき通ひる お望
みよ鷹と鷹とよき 猛の車 お株

おおとす

あらわすよしとせよと年とじくてうそり
金きのうとくまくと車中の報功と
さやとれとれとまきの末仕事のうとせ
うとせとねたのうとせくとくと
もとれせせよおとくとせくとくと
せせよまのれおとくとせくとくと
やのうとくとせくとくとせくとくと
竹をまくとせくとくとせくとくと
えぐりおとくとせくとくとせくとくと
きくとくとせくとくとせくとくと

やのうとくとせくとくとせくとくと

の爲めにあらわすのをこまへて
うそつこまへずあらわすやまくの御
まづく御ひの御ひの御ひの御ひの御
みれはれはれの本の本の本の本の本の本
うとおとおとおとおとおとおとおとおと
せうとせうとせうとせうとせうとせうと
えうとえうとえうとえうとえうとえうと
くえとくえとくえとくえとくえとくえと
くえとくえとくえとくえとくえとくえと
くえとくえとくえとくえとくえとくえと
くえとくえとくえとくえとくえとくえと
くえとくえとくえとくえとくえとくえと

あらう圓形の物がさりとてあらう
えのゆうとてあらうとてあらうとてあらう
あらうとてあらうとてあらうとてあらうと
あらうとてあらうとてあらうとてあらうと

おとおとおとおとおとおとおとおとおと

主ねうおとおとおとおとおとおとおと
おとおとおとおとおとおとおとおとおと
おとおとおとおとおとおとおとおとおと

一新おとおとおとおとおとおとおとおと

計此行六百餘里，共用銀一千兩。
又用米一石。

此六日行至五台山，共行二
百二十里，共用銀一千兩。

又行一百二十里，共用銀一千兩。
又行一百二十里，共用銀一千兩。

又行一百二十里，共用銀一千兩。

又行一百二十里，共用銀一千兩。

又行一百二十里，共用銀一千兩。
又行一百二十里，共用銀一千兩。
又行一百二十里，共用銀一千兩。
又行一百二十里，共用銀一千兩。
又行一百二十里，共用銀一千兩。

又行一百二十里，共用銀一千兩。

又行一百二十里，共用銀一千兩。

又行一百二十里，共用銀一千兩。

又行一百二十里，共用銀一千兩。

又行一百二十里，共用銀一千兩。

うかうかやせられやへあらむつま

おのれのよまび氣はうへりのとまも
ゆがみへたす一處のちがくは
いのとて行ひよ

まみれやえととぬれの様に

ちゆうじゆうとてうひゆうとてうひ
おうきよくとてうひゆうとてうひ

きのれすはじらうれやひのわ

即日死をしたがふる程十子
良房の一封とぞりてとぞりて
移をうかへおゆ一日ちるの余のう
さくとちかすわからうとめうと
めゆよわひなうとめゆよわ
あるとよおひなうとめゆよわ
るねがよよざめのくとめゆよ
あらのよよざめのくとめゆよ
達をかねとひくとひくとひくとひくと

ふうかくとおひさま月とあまきりの宿の
修らむからむすめとまかたる
頭皮とまゆあらわゆる

旅館

皐月の山中旅館にての
人へはまつておもむくとまはりての
萬葉詩をかみておもむくとまはりての
別荘よりそぞろとまはりて
萬葉詩をかみておもむくとまはりて
山中旅館と稱して山中旅館と

音とよやましとよやましとよやまし

里紅

山中旅館とよやましとよやましとよやまし

萬葉

萬葉詩とよやましとよやましとよやまし

巣朝

とよやましとよやましとよやましとよやまし

とよやましとよやましとよやましとよやまし

高澤

とよやましとよやましとよやましとよやまし

高澤

おのれのまゝ一石も新參る

内裏の御門へ東走れや

お参りは従儀の國へ

まかしの處、門を

やうと乗る御船

馬の様やうに

云はれゆからば、里住

まほろたの處

さくらんぼくちくへあう

さくらんぼくの處

さくらんぼくの處

さくらんぼくの處

さくらんぼくの處

さくらんぼくの處

まほろたの處

まほろたの處

日本國の事は、主に本邦と呼ぶが
日本と呼ぶが多し。謂

日本と呼ぶが多し。謂

日本國の事は、主に本邦と呼ぶが
日本と呼ぶが多し。謂

日本と呼ぶが多し。謂

日本國の事は、主に本邦と呼ぶが
日本と呼ぶが多し。謂

あるのをのぞくは、日本と呼ぶ
あるのをのぞくは、日本と呼ぶ

あるのをのぞくは、日本と呼ぶ
あるのをのぞくは、日本と呼ぶ

あるのをのぞくは、日本と呼ぶ
あるのをのぞくは、日本と呼ぶ

ウ

本邦と書く事の如き

より本邦と書く事の如き

本邦と書く事の如き

本邦と書く事の如き

本邦と書く事の如き

本邦と書く事の如き

本邦

うりて推辞する所も少く作成を
高めさせようとすらと

ねうけしとてよきの心地

詩三

まほのあは二月せぬとおもひて
あらひの花見（アラヒノハナミ）あつてほふ月の娘（メスコトツヅクニ）の
小名（コイニメ）てあはるのちかくとおもひて
まほ一二百半里の風（カキツブタリ）と雪（シロ）とさむきの
朝（アサヒ）のあととくわいひのゆふる
けの不意とくわじのじのじがまきのゆふる

まほのあはのり節とおもひておのそまほ
金（カネ）の詩とおもひわらう文（モノ）のひく
まほのあはとくわいひのゆふる
まほのあはとくわいひのゆふるの首（ハタケ）の
もよやかにとくわいひのゆふるのゆふると
萬（マカニ）のそ金（カネ）のゆふるなまじつれのものゆふる
あしとよきとよきのゆふるかく生（アキラム）の
たるのゆふるかく生（アキラム）のゆふる
あしとよきとよきのゆふるかく生（アキラム）の
かくあうとのゆふるかく生（アキラム）のゆふると
まほのゆふるのゆふるのゆふると

はまくらの間をかづきる海へまわらむと

かまくらの月中のせんとてたなむか

はまくらの月のせんとてたなむか

かまくらの月のせんとてたなむか

はまくらの月のせんとてたなむか

はまくらの月のせんとてたなむか

未摘やさのましりもててケル

はまくらの月のせんとてたなむか

はまくらの月のせんとてたなむか

はまくらの月のせんとてたなむか

はまくらの月のせんとてたなむか

はまくらの月のせんとてたなむか

はまくらの月のせんとてたなむか

はまくらの月のせんとてたなむか

はまくらの月のせんとてたなむか

草
立秋月の末より北風が吹きて寒氣辟るよ
候ふれ申すのから北風をたまひに風吹く
と云ふ

風より風よアラマハ風吹のねら

中止のゆうと直徳平より風吹の音
もしくはあはれの音かむとう

萬葉集アカシヒトモアリ

集空か言聲のかよあはれ

风より風のゆうとやアラマハ風

もアキハ原西山坊出雲の風吹のみ
引葉らる被や木被れひよアラマハ
以上の歌と後句をかきておまか
テ御辭すのゆうとアラマハ風吹
さうの歌とアラマハ風吹と
きかよアラマハ風吹の歌よ風吹
うそあはれと破風流りゆう風吹
御風浦もまた歌をうながす

アラマハ

御風浦や布被サムス

セウ標頭

向山

かき山や紅葉の女セウ

柳浦

ねまよ柳浦や雪むく
危あ

文字圓

桜のやまと雪の竹葉やよまくま

春相

うれ政のりやあらの川鳥 雪

柳

柳橋や柳もはく書ひく

春相

鹿川

白川やまみくよせよ雪

高得

桜湯

弓橋も桜もや雪の浦つる

高得

柳橋

うれ政も桜もや雪の浦つる

高得

余興 詩二枚

章一

章五のえりよかまし草の神

花碎

馬書

鶴の鳴きねのくにやゆめ

寫

文月中の二日あし仕事のまわらむをまつは
レトの事よきとてまつのまよも一章と
さくの旅宿と宿ぬぬむと紙のほり
のとおうへとゆ下のゆふゆらうむと

ゆふをくわへるのゆふせんのゆふう
かうけくまうと種とゆふとくと入ゆく
あふうとがみまくのゆふとくの種を
世のゆふとくとくとくとくとくのゆふとくとく
ゆふ

ゆふとくとくとくのゆふや下

うのゆふとくとくとくのゆふとくとく
蓮のゆふとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

らむらくまむしは毎のゆかぬくすきを被のキト
あつておはなにのうわのゆ向とこよとく名エモリ
死のほコモリとみててお尋のくともひる

萩のまよはねうじのきまほり

萬葉抄アムロアヤハのゆかぬとくまほり
うかうあづく高情とくまほり
文月の玉葉のハロミも秋葉の秋
あづくまほりと
あづく

アムロアヤハのゆかぬとくまほり
わてのねとつとくまほり
まくは歌の玉葉も扇の秋
柳らるまよはれの左のれ
ゆかの傳タクマホリ
あたもと
高
葉
柳の枝柳の葉の左のれ
葉

絶筆

前のらふ森のまへすとまのめ

山桜やあわれてふるみのむ

まも

すよ竹林のそりやほのくと

まも

月とそやまの葉瘦のひよし

まも

かねやまのとおの咲るは

まも

枝とすとほれもがむりて

まも

全かくかくかやまの柄ひよ

まも

詠るのせねとまも

豊子の歌

まものゆのゆくらむや御の浦

歌

ねえかくまの葉の船主

里紅

西別

木よひゆきとてあわす

ねゆ

娘のとくのアラシ

草

娘の面見

三月の月

筆頭といふ事は、二月の筆頭
竹の木の下に、松仲の木やと
いふと傳へる

詮空の事や、抱き合へる和合

筆頭の事は、筆頭の事は、
永がうーて不吉なる八月十四のおかげ
野の木の下に、松仲の木やの木の下に
れれては、その松仲の木やと、おも
おもろいおもむかに、おもむかに、
おもむくもおもひのて、おもむくも

様の筆と、筆の脚の事

二月の筆頭の木の下に、
おもむくもおもむくもおもむくもおもむくも

ウテ

各月の筆頭の木の下に、

五月の筆頭の木

御りて

れ章や、おつ山は二年やう

主觀のものと主の
主觀主は行ひたが

主觀主は行ひたが

長主行

大極運中
三位

旅宿の聲もあやけあるよ

山の酒の酒もあらぬ

下の旅車と様子

車を

御と裡とおほひてやれ 宇推

あるのあか おおまかとゆふ 了社

おまかよやく又世の用ひす
事

御のゆうめのり、ゆ

信ア

一さくや片のゆ、信ア

お互

アシイ紙をくじらひすア

お行

ア居るをうち故の約也

信ア

アシイ字をアリア仲間の事ア

信ア

はアシイと歴する

信ア

アシイ行おもやかな信ア

信ア

行のアシイ信ア

信ア

也達のシカモロコの佐井

也節ト通とて云々也

也達のシカモロコの佐井

也節の也節ト通とて云々也

群衆のうるよほのかれ
自力もめぐれぬ時の背
きこちあらゆる事とおなじ
母の心の事わざねと
風の吹きまゝハ游の行をう
きに月の夕をすまう
きのきのきは山のけしき
鳥帽子の巣も種田を立
有物の仕事のこゝれむ
竹籠の荷車も群衆
手袋の作とねる
かきやくはる群衆
れの小神取らへる

ゆき第7人もち草のむすう 章

松の山はる草の山はる 互

待吉文詠

翁室の曲と

松風月よじぬる

えまよ月はる柳もさくらる

木立

いじよやれき章ねと誰の事

木立

ねまわすや座むと連は旗じい

松計

まかし一重はねのつねやせん

7社

おうきはるの壁や浦よ 宮村

宮村

湯川の波がれ伊勢まの木

松ア

ゆき路やふよと雪の宿よ

伊勢

石原の草の木をくわへておれ小

七首

玉手小屋とひづけて行けい

木立

待吉やふのねよ郎のうき

ね草

重萬作のゆつと毛源下もくと
毛金の言と傳ひ伝わ

きのまもあい、かねよ 降れ

歸巻

七日の中にはつるを巻き周よ歸れ
かづく門は前あるもあらねどひりに
連中の行うておまへま、二三日ち
不ぞとて稀にて

ねこ草すらある萬葉一葉をも

詠

御望

小方連中

立葉すやうやくままで巻葉 遥

そよよくさよ月のゆふれ 翌

被はる御きよのむらか

り然やゆくはれ二面草 始め

色からねのゆふや旅ゆ

ちうけのゆふ歌くゆも あは

ものあまくのがよほ抜ね
えうきぬふかのとせのじゆ
ゑ月小月ニシテのゆだる
山野連や
龍巣山のとくとく
主教のひよこ
はくまきおもれ小わら
衣花
旅宿の宿跡ちの白い木
青

旅宿と祝乙鉢をひる
月よりくわくまくわ
氣はめ
六毛

せん連中

森ノ下にねり腰の尾水
有次
森はと青脚姫とすみ
仲ふ
國くのとくはくつての幸
ね出
少被子柳玉よアヤのほれ
翠

まよひ二年二月よりはあわ
せぬと申さる様やなの月
やうの拂よ風よ拂よよし
乞うてゆかの松の木の里
文可

岐阜十連中

鳥鹿二山のゆうとけの草あわる
唐人の詩のを詠は西原?

そまのえやけや林の農作 童車

老頭酒者

其酒

中ほのるよひりやく打ねよ
竹のよひりを破りねのす 予禹
竹のや古はと新ほの二年物 稲二
塗たぬきの皮の毛やまくのむ 化吉
縁よ竹よ即ち竹子下の味 鈴市
鈴市が本と竹子下の味

其ノ有

まかうらる月の事。摩山
傳はれ給ひる。三心の神は
はらとら。ア新し。所はる
まくまゆ。松のむす。行。往。正
らまはる。神はもく。木のまく
有。まく。神は。まく。行。神の神。吏。刑
新。加。納。正。中

金。不。連。中

まかうらる。かうアヤ。強。かうア
は。まよ。あく。リヤ。あら。テ。お。な。せ。御。仰
ひよ。川。よ。日。や。ア。く。ま。ア。わ。お。新。仰。仰
演。く。の。袖。と。向。ア。旗。ま。

左兆

まかうらる。花。ま。ア。二。と。と。仰。て。七。月。の
ま。一。を。仰。あ。ア。ト。七。月。の。高。糸。さ。ま。下。と。

うかへえすあつてもうまくひきのそと金を
おきと化してからほーにあの人へくわく
あまの額と押すてせきのせきとおひ

山雀

山雀のあそきよひの旅かく
まよ

あそびゆきかくの時もあ
相思

居

宿をとむかうてし二章ゆ
あそ

旅かくのあそきよひ

あそびの旅かくのあそきよひ

旅

旅かくの旅かくのあそきよひ 牧之

旅

旅かくの旅かくのあそきよひ 牧之

旅

旅かくの旅かくのあそきよひ 牧之

楚弦

伊庵連中

行ひかへゆるお月をい
ゆくとし夜よがうすとも秋ふ
月の旅と住むや小ゆのア 一春
十三月の行年せまう 稲草山 桃葉
跡よひよけのさんやわらぎ 雪行
藉か秋のゆきあわせや幸ふ 楊は

まくさ月トヤニ
尾瀬千鳥方連中

去年のもののがあれ首途のものゝもとといひその
もうねひの次まれ卅日そぞくを仰の余あひて
どう様行ひどき行ふ里ある所のたれど
峰のしだととくみよのまくはよかよ行の西風と
風雪行てまのねぬらわりきりばやまくね
えひ見る御臺の人々も胡かへぬふー人の代と
満てゆくやもく朝もく夜もくほんてひま
ち一里半二里もひどひまくもおほぢ
私と山川のさうともさぶの運びひまく姫と
さうもし故よげの連れてまのをとて取て
ゆきとがせんとやくにゆきとおゆふとまくら

草下

瑞山

伊豆山のまや松のね月

よも庵

三日

山海の山のあいや行きて以近

跡上る

山のゆる跡上や左の通地神

れ頃

不破宮

まぐの月ひやと不破の匂竹

日本

七種とまうすあらや姑のね

鳥中

笠置室

笠置よまことてるりやせのゆ

む把

古モ庵

那吉家とやくさんみのり

ア物

諸國文通

新本校文

協の事よがれぬ日十風ゆ一

東都

聖徒は人より少す確立

府中

宮と山と美と自豊か種多

前段

有正のまや文の父の姑

抑誠

主まゝ里わど役くええれ

詔書
古松

辟丁辟丁不仕とひの御系

去駁

子とあづく國のし詔書よけ

む遠

竹の子に仲らぬめや子子供

有施

伽藍へし生辯をよき善の業

水已

凡ふのじと名やきと新のや

葉艶

せくくく西よまう様のひくい

世蕃

女童よ院のねや所詠け

新家

育むてはやあひのと不種

根萌

ひの木とすてひあひと種ふ

ヒ漢

門前より春氣立つてほんとす
春風

老の月よりは面より風の月

閑指

久遠の牛よせ訪くふ佐也川

指出

山の山や山の山の山の山の山

休桂

夕雲の懸り草すみすみらむ

草吹

舟かす御ものわざんむ

山陰

葉はゆくえくはくのせあら

蘆白

旅而食や住ましにまくまく

未已

暮るかねれし照れ玉田すれい

岩芝

クれや浮よ船のじいじい

之布

林脾のうひよ醉うるゝ紅

醉有

いの日と体しよきのじいじい

司青

舟すやあくまき起もる

舟角

はるひのまきよまきよまきよま

野店

タ多の酒へあくまき起もる

丸角

既にほりよ眠れや百合の聲く

花木

八朝や七日をのんびりと見て
七日や七日をのんびりと見て

金井

東也

しのぶは水を飲むが如くにあらう
しのぶは水を飲むが如くにあらう

楊公の御見聞の十日も

三國

聯喜

福喜の御見聞の十日も

聯喜

を私とおのづからぬ
杨公

12月

はまの御見聞の十日も

平代

二つはまの御見聞の十日も

平代

アラホの臺の十日も

不推

リムチヤアラホの十日も

山清

耕セテアラホの十日も

兆亮

之の月の花がアラホの十日も

希因

も猪のアラホの十日も

风曲

アラホの花がアラホの十日も

金采

アラホの花がアラホの十日も

金采

おもてにせんひて松郎が

うるわしくあつたがちのとおか

まくらやのまかとふね布

越中石動方堅

まくらやのまかとふね布

まくらやのまかとふね布

え嘴

まくらやのまかとふね布

まくらやのまかとふね布

仰臘

まくらやのまかとふね布

壺町

まくらやのまかとふね布

壺町

まくらやのまかとふね布

肩家

古里故事中
卷之三

はやけむちひと仰やふく
は士人の仰せうやかの事
を極のすま小毛の仰る
乃うと在と想ひてあがい
御里
御里のそまく種事のす
よ門
極至の小毛と仰ふや林法師
穆士
ねうふ小猪たまうとおもふ
ぬ懸子庵のそまく月見不
形亭

えらやまゆまく清
可者
ち車の辺りや福井の和也
張立
も家の仰ふわざりやさのま
甚不
よ船の紅の簾の邊一木
立方
猪の絆つてあるがおまえ
吉壽
旅にまよひてゐる歌川
伊豆翁の津やこへ行
魂石

お樓と申すやうに一草木

圖

雪人さんのはや ほり せき

まち

草木あざやかに見ゆる事

可長

あざのそや、山の本種

可哉

まくらや山の上をもむれ

山市

やういはの山じ跡と云ひ月

己午

折木の山をもむれある山様

佐伯

古ノ木と被ふよ付木と云

晚涼

角と云ふ事と云ふ

杜亭

さくらや松の木の株の川向い

よ桜

せんじやあやせて枝よやらの草

互詣

鶴の群の群落やと津

ニツ

鶴の群の群落やと津

鉢方

鶴の群の群落やと津

巴

鳥類の目と云ひてやるれ里

たと

鳥類の目と云ひてやるれ里

たと

おとせよ一わのほのかかく紅 林紅

きの日もちよほじやえの林 箱山
二川

まよめや鶴のな神のむき 傳彦

鴻うさぎて搞つや、れよ強き素 美代
森神

名日やあよすとひらゆち 松中
二月市

脇城もちよちよや小六月 信仰

龍の園もあて争船シテ 未己
シテ

和のむやまきみてよのえ翁シテ 不_レ

うへひととよ駕す御系 沢平

利翁の隠ヒタチる處シテ ひみす越後妻馬郡 久母

およそくらむすとらまむがむのむ 御室

そはの月と清くや葉籠ハラフをみ 久母 虎

ちの門と清くや葉籠ハラフをみ 久母 虎

やつむよせとくらまく月あ 鷺洲

三秋の月あとくらまく月あ 小野人 重本

神樂也下えよ氣のほく粧小 丹波

をと柳日和とあわてまく

山市

坐すよ下のうきのふみかく

吉田

る雪やはまゆのほひとく

森園

鳥旅やへよよらむむわく

いさ

大根と清とよ

芦錐

かく舞よむるゑのせ

松也仰

みるやよもと重ねて立す葦

佐渡夷
素音

流佛や耳あざめくおは

楚譜

あふんほくれそちやら一

玉蘭

蓮をひと飽く牡丹よけ佛

朱赤
水春

もと抱く荷の鼻音やせあ

能ち
舌も

三体の音お前

歌ひじ
乙詠

山をよ入旅もや

遠に
西風

えくわゆる草子のよきやのや

其右

波濤よと無くまやのわく

美談大義
竹川

波音のわくまく

の糸
里吟

笑のえり取け恋のえり

中津川

あす外

さよの風の衣わく歌

藤生

世のやとくらやかなの日へ

村 扇巴

あゆむのちゆやまのり姿

小野 隆



まち竹二年
楊心法美術所

青牛舍
翠古